

## 第2回 翻訳とワイルド全集

日本における最初のワイルド翻訳は明治 24 年(1891)5 月の増田藤之助訳「美術の個人主義」で、“The Soul of Man under Socialism”の部分訳であった。その後明治時代は *Salome* や童話が次々と翻訳された。ここでは *De Profundis*、*The Picture of Dorian Gray*、詩の翻訳を中心に取り上げてゆきたい。

### (1) *De Profundis*

ワイルドの作品で最も早く日本に紹介されたのは“The Soul of Man under Socialism” (1891)であるが、*De Profundis* (1905) については、出版直後から継続的に紹介され、省略本とは言え、早くも明治 45 年(1912)には本間久雄訳『獄中記』(省略版)(新潮社)が出版されるほど受け入れられていた。*De Profundis* は明治 38 年 (1905) にロバート・ロス(Robert Ross, 1869-1918)によってアルフレッド・ダグラス卿(Alfred Douglas, 1870-1945)に書簡体形式で書かれた作品の私的な部分を削除して、*De Profundis* としてメッシュエン社より出版された経緯がある。

海外においても一般向けに *De Profundis* の完本が出版されたのは、昭和 24 年(1949)のことである。本来なら昭和 35 年(1960)まで極秘として大英博物館に寄託されたが、明治 45 年(1912)にアーサー・ランサム(Arthur Ransome, 1884-1967)が *Oscar Wilde: A Critical Study* を出版したことで、ダグラスとの間に裁判沙汰となり、証拠物件として持ち出され、アメリカのポール・レイノルズにより無削除完本 16 部が印刷されたのは大正 2 年(1913) 9 月 22 日のことで、昭和 24 年(1949)にはヴィヴィアン・ホランド(Vyvyan Holland, 1886-1967)がロスのタイプ・コピーをもとに‘the first complete and accurate version’として出版した。*Oscar Wilde: A Critical Study* (1912) については以下の通りである。

When Arthur Ransome's *Oscar Wilde: A Critical Study* (1912) appeared, Douglas sued the author for libel over certain passages in *De Profundis*, which had been omitted by Ross in the published version. The entire letter was read aloud in court when Douglas insisted that he had never received a copy despite Ross's assertion that one had been sent to him in 1897 (whatever was sent—whether the entire letter or excerpts—Ross, in a statement prepared for his solicitors, said that Douglas had told him and Wilde that he had thrown the type-script almost immediately into the fire). The jury found that the passages published from *De Profundis* were true. In the second edition, Ransome removed the passages out of consideration for Douglas. <sup>(1)</sup>

日本では、一連の *De Profundis* にまつわるワイルド像の変化については、本間久雄が注目している。

日本における *De Profundis* 受容については、拙著『書誌から見た日本ワイルド受容研究 (明治編)』(イーコン、2006年11月)の「第12章 *De Profundis* の紹介」でも触れたが、日本では早くも明治39年(1906)9月の『新小説』(第11年第9巻)に紹介された。夏目漱石(1867-1916)の「草枕」が掲載され、その中で「基督は最高度に芸術家の態度を具足したるものなりとは、オスカー、ワイルドの説と記憶してゐる」<sup>(2)</sup>との紹介がある。*De Profundis* からの引用といった言及はないものの、原文の‘the very basis of his (Christ's) nature was the same as that of the nature of the artist’<sup>(3)</sup>に相当するものである。その後は明治40年(1907)4月には平田禿木が「英国詩界の現状」と題する講演を行い、この中で *De Profundis* を紹介している。こうした *De Profundis* 受容について井村君江は次のように述べている。

...イギリス本国のワイルド復活の波をそのまま受けているわけである。外来の作品を入れる際、その本質を見きわめとうとの努力を払う前に、

このように性急にその国での評判や評価までそのままの形で入れてしま  
うのが、初期のわが国の外国文学摂取のあり方に見られる傾向であり、  
この場合も例外ではなかった。<sup>(4)</sup>

明治 44 年(1911)10 月には本間久雄が『早稲田文学』(第 71 号)に『獄中記』  
として省略版を初訳し、翌年には新潮社より単行本として出版した。本間の  
『獄中記』翻訳に強く影響を受けたひとりに島崎藤村(1872-1943)がいる。

最も私の心を慰めたものは、本間久雄君が譯したオスカア・ワイルド  
の『獄中記』であった。私は床上である翻譯を讀むのを楽しみとした。<sup>(5)</sup>

これは明治 45 年(1912)4 月の『中央公論』(第 27 卷第 4 号、中央公論社)に  
掲載された随想「日光」の一節である。この随想は後に「柳橋スケッチ」に  
収められ、大正 2 年(1913)4 月に出版された島崎藤村『微風』(新潮社)  
に収載された。大正時代に入ってから、大正 5 年(1916)9 月～大正 6 年  
(1917)1 月まで磯辺弥一郎(1861-1931)によって *De Profundis* の訳注が『中  
外英字新聞』に 10 回連載されたほか、大正 8 年(1919)には辻潤訳『ド・ブ  
ロファディスー—一名獄中記』(越山堂)、大正 9 年(1920)7 月に『ワイルド  
全集』(天佑社)の第 5 卷の中に神近市子訳『深き底より』、大正 9 年(1920)11  
月と大正 11 年(1922)1 月のには平田禿木訳注『新生』(アルス)なども出  
版された。大正 14 年(1925)9 月から大正 15 年(1926)2 月まで連載で杉山産  
七と三木二十一の翻譯で『獄中記』が掲載されている。完本の翻譯が登場す  
るようになったのは、大正 15 年(1926)3 月、6 月に三木正によりマックス・  
メイヤーフェルト(Max Meyerfeld)の独訳からの重訳が『早稲田文学』(第 242  
号)・(第 245 号)に掲載されてからのことである。

*De Profundis* の翻譯については様々な翻譯者がいるが、神近市子  
(1888-1981)は大正 5 年(1916)に葉山日蔭茶屋で大杉栄(1885-1923)を傷害、  
2 年の刑を受けた経緯がある。大正時代は社会主義運動、民衆芸術論が提唱

された時期であり、大正 8 年(1919) 8 月の大杉栄『獄中記』をはじめ、獄中や牢獄に関する文学が多く見られたことは、ワイルドの *De Profundis* の波動のひとつとして考えてよいだろう。獄中文学については大正 11 年(1922) 5 月の日夏耿之介「獄中文学考」(『東京朝日新聞』 5 月 25 日、26 日) がよい参考となる。日本での文学的なワイルド受容は *De Profundis* から始まったと言っても過言ではない。*De Profundis* の波動については、井村君江の一連の研究によって明らかにされている。昭和 42 年(1967) 2 月の「わが国における『獄中記』の波動――第 1 部」(『鶴見女子大学紀要』 第 4 号)、昭和 43 年(1968) 3 月の「夏目漱石とオスカー・ワイルドに於ける『獄中記』の波動 その二」(『鶴見女子大学紀要』 第 5 号)、昭和 43 年(1968)12 月の「島崎藤村とオスカー・ワイルド――わが国に於ける『獄中記』の波動 第三部」(『鶴見女子大学紀要』 第 6 号)、昭和 43 年(1968) 3 月の井村君江「佐藤春夫とオスカー・ワイルド」(成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院) はよい参考となろう。

## (2) 本間久雄訳『遊蕩児』

*The Picture of Dorian Gray* の日本への受容を考えると、本間久雄を忘れることはできない。明治 43 年(1910) 4 月の本間久雄「頹廢的傾向と自然主義の徹底意義」(『早稲田文学』 第 53 号) の中では *The Picture of Dorian Gray* への言及があり、また明治 44 年(1911)1 月の『早稲田文学』(第 62 号) には『ドリアン・グレー』の序文の翻訳が掲載された。これは無署名であるが、本間久雄の翻訳であると言われている。その冒頭部分と後半の部分を訳文と原文の両方を取り上げておきたい。

藝術家は美なるものゝ創造者である。

技巧は露はにし、作家を隠すのが藝術家の目的である。

批評家は美なるものゝ印象を他の方式若しくは一個の新しき材料に翻譯移植する事の出来る人である。

最も高尚なる批評の形式は、その最も卑近なものと等しく、自叙傳の一方式である。

美なるものゝ中に醜なる意味を見出す者は、魅せられるにあらずして腐敗せしめられるものである。誤れりと云ふべきである。

美なるものゝ中に美なる意味を見出す者は、啓發された人である。

かくの如き人々には望がある。

美なるものゝ意味はたゞ「美」なりとする者こそ選ばれたる人々である。

・・・(省略)・・・

藝術が眞に映す所のものは、觀者その人であつて、人生ではない。

一個の藝術作品に関して所説の多端なるは、その作品の新らしくあり、複雑であり而して生命の充實せるをしめすものである。

批評家の同ぜる時、作家は自己と一致する。

有用なるものを造る人に對しては、彼がそれを自ら讚美しない限りに於て、吾人はそれをゆする事が出来る。無用なるものを造る人にとりての唯一の口實は、自らそれを力強く讚美する點にある。

あらゆる藝術は全然無用なり。<sup>(6)</sup>

The artist is the creator of beautiful things.

To reveal art and conceal the artist is art's aim.

The critic is he who can translate into another manner or a new material his impression of beautiful things.

The highest as the lowest form of criticism is a mode of autobiography.

Those who find ugly meanings in beautiful things are corrupt without being charming. This is a fault.

Those who find beautiful meanings in beautiful things are the cultivated. For these there is hope.

They are the elect to whom beautiful things mean only beauty.

...(省略)...

It is the spectator, and not life, that art really mirrors.

Diversity of opinion about a work of art shows that the work is new, complex, and vital.

When critics disagree, the artist is in accord with himself.

We can forgive a man for making a useful thing as long as he does not admire it. The only excuse for making a useless thing is that one admires it intensely.

All art is quite useless. <sup>(7)</sup>

本間久雄は明治 44 年(1911)3 月に「オスカー・ワイルド論」(『早稲田文学』第 64 号)の中で *The Picture of Dorian Gray* についてワイルド自身が *Lippincott's Monthly Magazine* (『リップピンコット』誌)に発表したものを紹介している。

一切の創作は要するに作者自らの快樂のためなり、曰く藝術は道德とは異なる、そこに善悪なし、曰く作家は美の創始者にして批評家はこの美を作家とは別な様式で闡明するものなり <sup>(8)</sup>

さらに、本間久雄は大正 2 年(1913)4 月に *The Picture of Dorian Gray* を翻訳して『遊蕩兒』(新潮社)として出版した。大正 2 年(1913)5 月に本間久雄「『遊蕩兒』に就いて作者は何を描かんとしたか」(『新潮』第 18 卷第 5 号)の冒頭で次のように述べている。

オスカア、ワイルドの長篇『遊蕩兒』(ドリアン、グレー)と譯してゐるうちに、その中に描かれた人生と藝術の關係とか人生と道德の關係とか又は道德と藝術の關係とかうふさまざまの問題に逢着して今更な

がら新らしく心の中に種々な疑問を喚起させられると共に、作者ワイルドは『遊蕩兒』に於て仰々何を描かんとしたかといふことも考へさせられた。<sup>(9)</sup>

本間はその後、ワイルド自身が当時の批評に答えた書簡を紹介している。その書簡は次の通りである。

1809年6月26日 第一信 セント、ゼームズ、ガゼット

1890年6月27日 第二信 セント、ゼームズ、ガゼット

190年7月1日 「デーリー・クロニクル」に寄せたる手紙

日付については第一信は1890年6月26日、3番目のものは1890年7月1日の誤植であろう。本間の関心は「人生と藝術」、「人生と道徳」の關係に寄せられていたと思われる。

本間久雄訳『遊蕩兒』を契機に、大正2年(1913)6月に佐藤春夫は『スバル』(第5年第6号)に『遊蕩兒』の譯者に寄せて少し許りワイルドを論ず」を發表し、一連の『遊蕩兒』翻譯論争」として知られる論争が起きた。この論争が佐藤春夫の文壇デビューの大きな契機になったことも佐藤春夫とワイルドを考える上で興味深いものがある。<sup>(10)</sup>

佐藤は『遊蕩兒』の譯者に寄せて少し許りワイルドを論ず」の中で

「ドリアン・グレイの肖像」は「死の勝利」と同じ位みな程度で、しかも「死の勝利」よりはもつと新時代に属すべき近代文学の諸傾向を打つて一丸にしたやうな気がした。<sup>(11)</sup>

と述べ、*The Picture of Dorian Gray*の概要について触れ、その後、佐藤春夫はさらに翻譯について触れることとなる。佐藤春夫は原文の最初の4頁を例にして誤訳の指摘を行っている。しかし、それは単に誤訳の指摘を越え、

文壇全体に対する批判はもちろんあるが、佐藤春夫のワイルドへの強い関心を明らかにしたことにもなる。井村君江は「佐藤春夫」(『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)の中で佐藤春夫の言として

ワイルドとダヌンツィオは退廃派、耽美派であり、その根底にニーチェの哲学がある<sup>(12)</sup>

を取り上げている。大正2年(1913)10月に本間久雄「ワイルドとダヌンチオ」(『早稲田文学』第95号)が発表されていることも注目しておきた。井村は昭和43年(1968)3月の「佐藤春夫とオスカー・ワイルド」の中で大正期以降であるが、「酒の詩 恋の詩」「私の享楽論」「人生の幸福」でワイルドを引き合いに出しており、佐藤春夫の人生観や文学芸術観が様々な角度から示されていることを指摘している。<sup>(13)</sup>

### (3) 詩の翻訳

ワイルドは評論、小説、童話、戯曲、詩など様々なジャンルでの作品を発表している。ワイルドの詩については、まずは「詩人としてのワイルド」が紹介された。明治期のおもな紹介の状況は以下の通りである。

明治40年(1907)4月 岩野泡鳴「自然主義表象詩論」(『帝国文学』第13巻第43号)

明治40年(1907)5月 平田禿木「英国詩界の現状」(『明星』未歳第5号)

明治41年(1908)6月 平田禿木「詩人オスカー・ワイルド」(『東京二六新聞』24日～26日)

明治41年(1908)9月 岩野泡鳴「詩人オスカーワイルド」(『太陽』第14巻第12号～13号)(～10月)

明治42年(1909)4月 THE ACADEMY 舎生「オスカア・ワイルドの詩」(『スバル』第4巻第4号)



*De Profundis* の出版以後、詩人としてのワイルド紹介、その後は詩の紹介が特に行われるようになった。<sup>(14)</sup>

大正期に入ってから詩がそれぞれ紹介、翻訳されるようになり、大正9年(1920)1月には日夏耿之介(1890-1971)がワイルドの詩をかなりまとまった形で翻訳し、『早稲田文学』(第170号)に発表したのである。日夏は大正3年(1914)に早稲田大学英文科を卒業した。卒業論文は『ガブリエル・ダヌンツィオ研究』である。在学中に西条八十(1892-1970)等と共に『聖盃』(後に『仮面』と改題)を創刊。昭和14年(1939)3月には『美の司祭—ジョン・キイツがオードの創作心理過程の研究』で文学博士の学位を受け、6月に『美の司祭』(三省堂)を出版している。

卒業論文で研究したダヌンツィオ、博士論文で論じたキーツ、全詩集を訳出したワイルドを日夏耿之介は、大正時代の外国文学輸入期の気運を代表する文学者として見ており、その共通する特色を「浪漫主義、神秘主義、象徴主義、唯美主義、デカンダンス文学」と見る。<sup>(15)</sup>

日夏は「ワイルド詩抄」として15の詩を紹介している。日夏訳の題名と原題を紹介しておきたい。<sup>(16)</sup> 尚、この翻訳は大正9年(1920)9月の矢口達編『ワイルド全集』(天佑社)の第4巻に収録された。

『ラゼンナ』	RAVENNA
「嗟乎」	Hélas
『詩集』	POEM
「自由女神」	ELEUTHERIA
「エロースの花園」	THE GARDEN OF EROS
「奇しき玫瑰花」	ROSA MYSTICA
「イティスの歌」	THE BURDEN OF ITYS

「菟菝」	WIND FLOWERS
「ハルミデース」	CHARMIDES
「黄金の華」	FLOWERS OF GOLD
「劇場の印象」	IMPRESSIONS DE THEEÂTRE
「パンテア」	PANTHEA
「第四楽章」	THE FOURTH MOVEMENT
「人性の歌」	HUMANITAD
「愛の華」	FLOWER OF LOVE
「集外詩篇」	UNCOLLECTED POEMS
「訳詩」	TRANSLATIONS
「スフィンクス」	THE SPHINX
「レディング牢獄歌」	THE BALLAD OF READING GAOL
「散文詩」	POEMS IN PROSE
「未刊の詩」	AN UNPUBLISHED POEM

上記の項目にはそれぞれの詩がさらに所収されている。例えば、「自由女神」(ELEUTHERIA)には

「自由に付へる小曲」	Sonnet to Liberty
「女帝王福哉」	Ave Imperatrix
「ミルトンへ」	To Milton
「ルキ・ナポレオン」	Louis Napolen

をはじめ、それぞれ詩が所収されている。

日夏耿之介は昭和 25 年(1950)11 月の『ワイルド全詩』(創元社)の解題の冒頭で次のように述べている。

オスカア、ワイルドは初めに詩人であった。そして最終に詩人であった。

その一生は詩は行動に翻訳せんとして自ら顛倒した夢想者の伝記である。<sup>(17)</sup>

とある。また、最後には以下のように言葉を結んでいる。

ワイルドは断じて大詩人ではない。しかしかれは多くの問題を帯びて現出した近代の卓越した詩人であった。<sup>(18)</sup>

井村君江は「解説 日夏耿之介とワイルド」の中で次のように述べている

『明治大正詩史』で説いている大正期の外国文学移入期の機運について、この時期に紹介されたダヌンツィオ、ワイルド、ポー、ニーチェ、メーテルリンクなどは程度の差こそあれデカダンス文学、浪漫主義、神秘主義、象徴主義の作家として同質のものを持つとみる傾向が、文壇や研究者間にあつたと書いているが、大正期に紹介された外国文学の特色ある流れを、日夏は自分の趣向から十分に摂取し、その中心にダヌンツィオ、ワイルドそしてキーツを置いていたのである。<sup>(19)</sup>

なお、日夏訳のワイルド詩集が大正時代に発表されたのは以下の通りである。

「ワイルド詩抄」(『早稲田文学』第70号、1920年1月)

『ワイルド詩集』(矢口達編『ワイルド全集』第4巻、天佑社、1920年9月)

『ワイルド詩集』新潮社、1921年3月

ワイルドの詩については海外でも次々と出版されているので紹介しておきたい。Isobel Murray, editor. *Oscar Wilde: Complete Poetry* (Oxford: Oxford University Press, 1997)、Bobby Fond and Karl Beckson, editors.

The Complete Works of Oscar Wilde. (Volume 1: Poems and Poems in Prose. Oxford: Oxford University Press, 2000)、Lisa Rondensky, editor. *Decadent Poetry from Wilde to Naidu* (London: Penguin Books, 2006)等がある。

#### (4) ワイルド全集

本邦初の「ワイルド全集」は大正9年(1920)3月から9月にかけて矢口達編『ワイルド全集』(天佑社)(全5巻)で刊行された。この全集の評価については、昭和55年(1980)7月の平井博「日本における Oscar Wilde 書誌」(『オスカー・ワイルド考』(松柏社)に詳しいが、「この全集はわが国 Wilde 研究に一つの epoch を画したものである」<sup>(20)</sup> 評価は、ゆるぎないものであろう。翻訳者は全5巻の編集代表の矢口達をはじめ、本間久雄、小山内薫、日夏耿之介、秋田雨雀(1883-1962)、中村吉蔵(1897-1941)、楠山正雄(1884-1950)、島村民蔵(1888-1970)、坪内士行(1887-1986)、谷崎精二(1890-1971)、河竹繁俊(1889-1967)、神近市子の12名で、当時一流の顔ぶれであることは、ワイルドが如何に当時日本でもてはやされたかを物語るものである。

この全集は舞台上演とともにワイルド唯美主義流入の源泉として、同時代の作家らの深い影響を与えた。また、長く作家・学者らの研究の定本としての位置を占め、本邦におけるワイルド移入史を考察する、欠かせぬ意義を有している。<sup>(21)</sup>

構成としては第1巻は小説、第2巻は戯曲、第3巻は戯曲及び童話、第4巻は詩集、第5巻では論文集や随想、書簡も数通収録された。収録の内容は以下の通りである。

矢口達監修『ワイルド全集』(第1巻)天佑社

矢口達訳『ドリアン・グレイの画像』

秋田雨雀訳『アーサー・サヴィル卿の犯罪』

秋田雨雀訳『カンタヴィールの幽霊』

秋田雨雀訳『模範金満家』

秋田雨雀訳『WH氏の肖像』

矢口達訳『秘密の無いスフィンクス』

矢口達監修『ワイルド全集』（第2巻）天佑社

中村吉蔵訳『サロメ』

本間久雄訳『フロオレンスの悲劇』

楠山正雄訳『バゼウア公爵夫人』

島村民蔵訳『ウキンダミヤ夫人の扇』

坪内士行訳『理想の夫』

矢口達監修『ワイルド全集』（第3巻）天佑社

谷崎精二訳『真面目なる事の必要』

河竹繁俊訳『何んでもない女』

小山内薫訳『エエラ』

矢口達訳『柘榴の家』

矢口達監修『ワイルド全集』（第4巻）天佑社

日夏耿之介訳「ラゼンナ」

日夏耿之介訳『詩集』

「自由女神」「エロースの花園」「奇しき玫瑰花」「イ  
ティスの歌」「菟菝」「ハルミデース」「黄金の華」「劇  
場の印象」「パンテア」「第四楽章」「人性の歌」「愛の  
華」「集外詩篇」「訳詩」「スフィンクス」「レディング  
牢獄歌」「散文詩」「未刊の詩」

矢口達監修『ワイルド全集』（第5巻）天佑社

矢口達訳『架空の頽廃』

本間久雄訳『ペン、鉛筆及毒薬』

島村民蔵訳『芸術家としての批評家』  
神近市子訳『深き底より』（獄中記）  
小山内薫訳『仮面の真理』  
本間久雄訳『社会主義と人間の靈魂』  
矢口達訳『雑纂』

日本における西欧文学の翻訳全集の歴史を見ても、この『ワイルド全集』以前に実質的に全集として世に出たものは、大正 6 年(1917)1 月～2 月に出版された平田禿木・戸川秋骨訳『エマアソン全集』（全 8 巻）（国民文庫刊行会）くらいであろう。シェイクスピアについては、明治 38 年(1905)5 月から明治 42 年(1909)11 月にかけて出版された戸沢姑射・浅野馮虚訳『沙翁全集』（全 10 巻）（大日本図書）もあるが、これはわずかに全 10 巻 10 作品の翻訳にとどまり、実質的な全集は、坪内逍遙(1859-1935)によって昭和に入るまで完成しないのである。吉江喬松監修『モリエール全集』（第 3 巻）（中央公論社）が出版されたのは昭和 9 年(1934)9 月～12 月のことで、近代劇運動や「新しい女」の象徴とされるノラを創作したイブセンの翻訳全集が登場するものも昭和戦前のことであった。ワイルドは明治 24 年(1891)5 月に作品が紹介されてからわずか 30 年の間で全集が登場したことになる。

天佑社版『ワイルド全集』は明治 39 年(1906)にニューヨークで出版されたノッティンガム・ソサエティ版に準拠している。イギリス最初の全集は、明治 41 年(1908)にロバート・ロスによるメジュエン版が権威ある全集とされている。イギリスよりもアメリカの方で全集が早く出されたのも、「ワイルドとイギリス」の関係、「ワイルドとアメリカ」との関係を考えると興味深いものがある。天佑社版の全集は、平成 7 年(1995)10 月に日本図書センターより復刻された。復刻版の第 5 巻には荒井良雄「オスカー・ワイルドの世界ー『ワイルド全集』[復刻版]解説」もあり、あらためて『ワイルド全集』（天佑社）の再評価が行われた。

## (5) その他の翻訳

ワイルドの翻訳については詩、箴言、小説、戯曲など、様々なジャンルの作品が翻訳されている。大正元年(1912)8月の山村暮鳥訳「すふゑんくす」(『詩歌』第2巻第8号)、9月の本間久雄訳「意外」(『新潮』第17巻第3号)、10月の小沢愛圀訳「秘密のないスフィンクス」(『黒耀』第1巻第1号)をはじめ、大正2年(1913)4月には生方敏郎訳『ワイルド警句集』(新潮社)も出版され、大正3年(1914)3月に鶴沼直訳『ウィンザー夫人の扇』(尚文堂)、大正8年(1919)9月の辻潤訳『ド・プロファンデス一名獄中記』(越山堂)へと続いている。また、拙著『書誌から見た日本ワイルド受容研究(明治編)』(イーコン、2006年11月)でも紹介したが、“The Soul of Man under Socialism”の翻訳も大正時代に入ってから本格的に行われたことは、ワイルド翻訳史を考える時には注目すべき点のひとつである。特に近衛文麿が“The Soul of Man under Socialism”の翻訳に取り組んだことは近衛の立場を考えると複雑なものがある。詳細については「第15章 政治とワイルド」で触れることとする。

その他の翻訳としてここで大きく取り上げておきたいものは、“Impressions of America”(1883)の翻訳である。大正2年(1913)6月の無署名で紹介された「アメリカ印象記」(『文章世界』第8巻第8号)には8頁に渡って翻訳されている。その冒頭は次の通りである。

恐らく私はアメリカを一の極楽として描き得まい。——まあ普通の立場から言へば私は此の國に就て、ほんの僅しか知らないから。私はその國の緯度も経度も挙げ得ないし、呉服太物の価値をも計算し得ないし、また政治に就いても深く知つても居らぬ。かういふ事柄は諸君を興がらせもしないだらうし、私に取つても亦確に何等の興味もない。<sup>(22)</sup>

また、最後の部分は以下の通りである。

人は皆二十一歳になると選挙権が得られる。それゆゑ、政治的の知識は直に得られる。アメリカ人は世界中で最も善く政治的に教育された國民だ。自主と云ふ言葉の美と自由といふ物の価値を吾人に教へ得る國へ行くことは、全く価値のあることだ。(23)

冒頭の部分と最後の部分を西村孝次訳でも見てみよう。

アメリカを全体的にみて幸福の楽土として私は心に描くことはできないような気がいたします—通常の観点から見てわたくしがあの国について知るところ極めて僅かであります。あの国の緯度も経度も存じておりません。あの国の織物の価値を測定できませんし、あの国の政治にも大して通曉しておりません。これらはみなさんに興味を起こさせないかもしれない問題であり、またわたくしには確かに興味ありません。(24)

男は誰でもみな二十歳になると投票を許され、それによって政治教育を身につけます。アメリカ人は世界中でもっとも政治的に教育された人びとであります。われわれに自主という語のうつくしさと自由という物の価値を教えてくれる國へ行くのは行く甲斐があるというわけではありません。(25)

何故この時期に“*Impressions of America*”が翻訳、紹介されたのかははっきりしないが、大正デモクラシーを念頭に入れると、「人は皆二十一歳になると選挙権が得られる」などの内容は意味深いものだ。西村訳では「男はみな二十歳になると投票を許され」となっている。西村は「アメリカの印象」の解題でもこの年齢等については特に触れていない。この部分について **Karl Beckson** の *The Oscar Wilde Encyclopedia* では次のように簡単に紹介しているに過ぎない。



Every male is allowed to vote when he reaches the age of 21, Wilde notes, and Americans are “the best politically educated people in the world.” Wilde concluded with the mark that it is “well worth one’s while to go to a country which can teach us the beauty of the word FREEDOM and the value of the thing LIBERTY.” (26)

ワイルドには他にアメリカ人（像）の検討をしているものに“The American Invasion”(1887)、“The American Man”(1887)があることも付け加えておきたい。

## まとめ

ワイルド翻訳史における大正時代の大きな特徴は *The Picture of Dorian Gray* の翻訳、『ワイルド全集』の翻訳、ワイルド詩の翻訳といったことが大きな業績であろう。特に、日夏がキーツやダヌンツィオを読みながらワイルドの詩の翻訳に取り組んだことは、「詩人としてのワイルド」を高く評価したことになる。明治時代における「詩人としてのワイルド」のとらえ方をさらに一歩進めたことになるだろう。

## 参考資料

阿部宏「Oscar Wilde と America」(『東北アメリカ文学研究』第1巻第3号、1980年3月)

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯、武蔵野短期大学、2001年6月)

川戸道昭・中林良雄・榊原貴教編『大正期翻訳文学画像集成』(第6巻 ワイルド集)(ナダ出版センター、2003年)

## 注

- (1) Beckson, Karl. *The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998), p.80.
- (2) 夏目漱石「草枕」(『新小説』第11年第9巻、1906年9月)、p.120.
- (3) *Complete Works of Oscar Wilde*. (London & Glasgow: Collins, 1990), p.923.
- (4) 井村君江「オスカー・ワイルド」(福田光治他編『欧米作家と日本近代文学』第5巻、英米篇2、1975年6月)、p.214.
- (5) 島崎藤村「柳橋スケッチ」(『微風』新潮社、大正2年4月)、p.305.
- (6) 「『ドリアン・グレイ』の序文」(『早稲田文学』第62号、東京堂書店、1911年1月)、pp.327-328.
- (7) *Complete Works of Oscar Wilde*, p.17.
- (8) 本間久雄「オスカー・ワイルド論」(『早稲田文学』第64号、東京堂書店、1911年3月)、p.15.
- (9) 本間久雄「『遊蕩児』に就いて作者は何を描かんとしたか」(『新潮』第18巻第5号、1913年5月)、p.17.
- (10) 谷沢永一「『遊蕩児』翻訳論争 佐藤春夫—本間久雄」(長谷川泉編『近代文学論争事典』至文堂、1962年12月)でも取り上げられている。
- (11) 佐藤春夫「『遊蕩児』の譯者に寄せて少し許りワイルドを論ず」(『スバル』第5年第6号、1913年6月)、p.123-124.
- (12) 井村君江「佐藤春夫」(山田勝編/日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)、p.533.
- (13) 井村君江「佐藤春夫とオスカー・ワイルド」(成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院、1968年3月)、pp.257-261
- (14) 佐々木隆『書誌から見た日本ワイルド受容研究(明治編)』(イーコン、2006年11月)、p.94.
- (15) 井村君江「日夏耿之介」(『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)、p.529.
- (16) 日夏耿之介「ワイルド詩抄」(『早稲田文学』第170号、1920年1月)、

pp.167-194

- (17) 日夏耿之介『ワイルド全詩』講談社、1995年12月、p.428.
- (18) Ibid., p.486.
- (19) Ibid., p.488.
- (20) 平井博『オスカー・ワイルド考』（松柏社、1980年7月）、p.181.
- (21) 築山尚美「ワイルド全集」（『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月）、p.510.
- (22) 「アメリカ印象記」（『文章世界』第8巻第8号、博文館、1913年6月）、p.40.
- (23) Ibid., p.47.
- (24) 西村孝次訳「アメリカの印象」（『オスカー・ワイルド全集』第5巻、青土社、1988年12月）、p.188.
- (25) Ditto.
- (26) *The Oscar Wilde Encyclopedia*, p.162.